

大阪の綿商人仲間

| | |
|-----|---|
| 著者 | 渡辺 整治 |
| 出版者 | 法政大学史学会 |
| 雑誌名 | 法政史学 |
| 巻 | 12 |
| ページ | 109-115 |
| 発行年 | 1959-10-10 |
| URL | http://hdl.handle.net/10114/11184 |

大阪の綿商人仲間

渡 辺 整 治

大阪において綿取引が組織的に営まれた最初のものは「綿市」である。寛永年間（一六二四—四三）京橋一丁目において青物市、川魚市と相並んで綿市が設けられ、畿内、近江等の実綿、繰綿を引請け、江戸を始め諸国への繰綿輸送を行っていた。その後、正保年間（一六四四—七）に綿市問屋と改め仲間を組織して営業するに至ったが、後に移転を命ぜられて相生西ノ町に移り、町奉行石丸定治の命により三所綿市問屋と改めた。当時一七名の問屋が営業しており、官は仲間外の類似の営業を禁じた。

かくして「三所綿市問屋」の誕生を見たのであるが、万治年間（一六五八—六〇）に至ると江戸、北国、西国筋へ向けて繰綿輸送を専業とする「綿買次積問屋」が起り、更に寛文六年（一六六六）七月には実綿、繰綿の仲買と篠巻、綴糸等の綿加工をも併せ営む「綿屋仲間」が生れた。

このように綿取引は次第に分化され、各々仲間組織の形態を取るに至ったが、これら三者間の分業が莫然としている間は、相互間において営業範囲をめぐる紛争がしばしば繰返えされた。それ

てこうした紛争を繰返すことによつて営業範囲は次第に明確となり、更に幕府の保護（株の許可）の下に仲間組織の強化がはかられて、大阪の綿取引は、これら三郷綿商人の独占と化して来るのである。一方独占化は台頭してくる在郷綿商人、綿作農民に対する自衛手段でもあった。

以上の如くして、寛永頃から綿取引の発展は三郷綿商人の下にその組織を整備発達させて来たのであるが、更に注目すべきことは、信用取引の発達に伴い延売買がおこなわれ、取引の円滑と大々的な取引とを目的とする集合的な取引機関の発生を見たことである。

宝暦一〇年（一七六〇）小西町に「繰綿延売買会所」が設立されたが、その後更に明和九年（一七七二）、二ヶ所の増設がなされた。しかるに右会所の設立は近接農村の綿値段を下落させ、綿作農民、在郷商人の猛烈な反対にあい、三会所共に天明七年（一七八七）には廃止されるに至った。

所で右会所の廃止後も、綿会所設立の願は絶えることなく、

文化三年（一八〇六）「実綿市場」の設立をみた。その後実綿市場の發展は、三所綿市問屋の圧迫から伸び悩み文政二年（一八二九）には休株となったが、天保四年（一八三三）平野郷に再興され、更に同一〇年（一八三九）には玉造中町にも増設された。前者は天保改革により廢止されたが、後者は明治維新まで継続されたらしい。

大阪周辺の綿作と流通については、近年、資本制生産の生成、寄生地主制の生成と云う課題を以って研究されているのであるが、都市問屋資本と在郷商人、商品生産農民の諸矛盾にしても、都市問屋資本自体の研究は更に追求されるべきであろう。尙、小稿は初めての研究―卒業論文「近世大阪の綿市場」第三節の一部分であり、紙数の関係から繰綿延売買会所、実綿市場は割愛した。

一 三所綿市問屋

相生西ノ町に移転し一七名の仲間をもつて「三所綿市問屋」と称するに至ったことは、前に述べた所であるが、その後明和九年（一七七二）七月、山城屋長兵衛、外四軒の問屋は株を許可され年々冥加銀七枚を上納することとなり、更に安永四年（一七七五）二月、綿屋善右衛門を加えて冥加銀を九枚とした。その後もなを同安永年中に六名を加え合計一二名を数えるに至り、冥加銀一年一八枚を上納することになった。而して是等新規加入の問屋は元來綿屋仲間であったが、綿問屋同様の業を営んでいたが為に、問屋より告訴せられ加入するに至ったものである。⁽²⁾

同仲間の営業について大阪市史に、「(1)当仲間は諸方より実

綿、繰綿を引請け綿屋仲間其外諸方に売捌くを業とす。(2)当地綿不捌にて百姓及在々仲買人等困窮の節は先銀を渡して買取るを例とす。(3)綿は上中下品数多く、客方仲買より品切物注文ありとも当仲間にて相調へ差支を生ぜしめず。(4)実綿は銀百目につき和市何十何斤（一斤二百二十目、和市は替の義なり）と称し、荷主より二匁三分を請取り、内一匁三分を問屋口錢とし、一匁を買手に口錢として歩引し、繰綿は銀百目につき和市何匁何百目と称し、荷主より二匁六分を請取り、内一匁三分を問屋口錢とし、一匁三分を買手に口錢として与う。⁽³⁾とあり、口錢一匁三分を利銀とする実綿、繰綿の委託販売であった。また商品である綿の獲保の手段として、(2)にあるように、在方の仲次商人に対して買入資金を貸与し、綿作農民に対しても年貢や肥料代銀などの前貸を行っており、このような金融機関としての機能がまた一つの副次的な業務であった訳けである。然し反面このような金融業務を行うことによって、綿問屋仲間の仲買及び綿作農民支配が開始されて行ったと考えられよう。例えば繰綿の延売買は、極度に生産者価格を引下げたのであるが、それも前貸による商品Ⅱ綿の獲保がなかったら出来ないことであった。

諸方綿産地よりの、綿荷の引き請けは、在方仲次商人の手を経て行われ、自らがままで買付に出張したり、人を派して百姓綿を直買することは禁ぜられていた。⁽⁴⁾この在綿直買については同仲間の仲間定法にも「綿屋仲間、綿買次積問屋及諸国客方同道にて在方に到り、実綿繰綿の直買を為すべからず。」と規定されているが、然かし、これらの禁令、仲間規約は応々にして破られ、その

都度在綿直買の特権をもつ綿屋仲間との間に衝突が繰返えされた。

また売捌先は、綿買次積問屋、綿屋仲間、諸国の綿商人であるが、取扱数量と価額については、寛政二年、同三年の実綿、繰綿についてその一端を伺うことが出来る。即ち「寛政二年、三年の三所綿問屋引請実綿繰綿廻着額」は寛政二年（一七九〇）実綿一四三四一本、繰綿八八五本、同三年（一七九一）実綿五〇二九本、繰綿一一五五本となっている。⁽⁶⁾

以上述べた如きものが、三所綿市問屋の営業であるが、見落すことの出来ないものに、その有する所の独占的な特権がある。

同仲間は、実綿に限り他所他国に直売又は直船積し得るは綿問屋に限るとの特権をもっていた。次に示す文化五年（一八〇五）十二月に差出された「乍恐口上」は、その間の事情をよく示している。

「実綿に限り私ども仲間外にて御当地は不及申他所他国より直買仕候とも御当地並他所他国へ直売直船積仕候儀は私ども仲間相限り候儀にて外々にて直売直船積不相成候。万一外々にて御当地は不及申他所他国へ直売直船積仕候者有之節は私ども仲間より差留申候。若相止不申候節は御願奉申上候へば是迄御差留為被成下候御儀に御座候。」

この様に実綿の直売、直船積の特権が犯された場合、之に對しその中止を勧告し、聴かざれば町奉行所に出訴に及んだのである。

しかしこの特権が犯された場合でも、規定の口銭を支払えば、自己の直売直船積とみなしてこれを許したのである。この様な口

銭を居取口銭と云つて⁽⁸⁾いる。

実綿の直売、直船積にしても居取口銭にしても、この様な特権は三所綿市問屋にとつての一つの權益擁護であるが、それは例えは、綿屋仲間が在方の綿直買の特権をもっている様に、当時の株仲間すべてについて見られる所である。⁽⁹⁾しかしこの様な都市商人仲間の独占的な性格は、必然的に在郷商人や農民を圧迫せずにはおかない。三所綿市問屋の先述の如き独占的な特権は、文政六年（一八二二）摂河両国一〇〇七ヶ村の綿作農民および在郷綿商人からなる国訴事件をひき起した。

この事件については既に研究もいくつも見られるのであるが、⁽¹⁰⁾この事件によつて受けた三所綿市問屋の打撃は大きかった。摂河一〇〇七ヶ村が三所綿市問屋を相手取つて訴えたその要旨は次の如きものである。

「摂河両国に於いては田畑共に多く綿を作り、新綿の採取期には近郷は勿論、遠国の商人も入来り、手広く売却されていた。然る所近年、三所綿問屋の取締が嚴重を極め直売直船積を禁じ、犯すものがあれば大阪川内は勿論、難目、住吉、堺等に積下げたる荷物をも問屋浜先まで積戻させ、謝罪証文の外に居取口銭まで徴する。ために在方商人は綿問屋の手先同然となり、他国商人も村々に入込むことができない。一方実綿値段は三所綿市問屋に買いたたかれ踏倒値段である。僅か八、九軒の綿問屋のために数万の百姓が莫大な損毛を被むり現状のままでは、貢租を延滞するか、綿作をやめるかのいずれかである。願くは旧規の如く直売、直船積共に勝手次第に出来る様仰せつけられ度い。」⁽¹¹⁾要するに右の趣旨

は三所綿市問屋の独占的買占に対する棉作農民の自由取引の要求であるが、同時にそれは在郷商人の要求でもあった。生産地の綿直買権を綿屋仲間に握られている三所綿市問屋にとっては、在郷中次商人が綿獲保の足場であるために、このように両者の対立が表面化して来ると、結局譲歩する以外に方法がなく、右の訴訟に對し問屋側の回答は、「三所綿問屋は、百姓が銘々手作りの綿を在方にて直売直船積と爲すに、故障を入るるにあらず、然らば年貢上納差支え云々は有るべからざる理なり。畢竟近年余商売の者又は船宿等が、諸国綿買客に勸むるに、在方との直引合に及ばば、下直に買入るを得べし、との甘言を以てし、当仲間の取扱荷物を減ずるを以て直売直船積の禁を主張する所以なり。縱令大阪川内を通行すとも、真に百姓手作の綿にして当地の者右売買に与らず、正路の直売直船積なれば故障を言う所無しと。」⁽¹²⁾これに見られる如く、三所綿市問屋は、特権とする直売、直船積の特権をも放棄する程に全面的譲歩を余儀なくされているのである。

二 綿買次積問屋

万治年間に興った綿買次積問屋は、その後次第に発達して享保年間（一七一六—一七三五）には仲間數四〇名に達したが、以後漸く退転し、明和末年僅かに一軒を存するのみとなった。その原因については明らかではないが、高橋亀吉氏は「尾張、三河綿が発達して江戸の大需要は、尾張、三河に由って供給せられるに至りし結果」であるとされている。⁽¹³⁾

この様な衰退の時に綿屋源之助が冥加金を上納して、綿買次積

問屋株を出願したので、問屋一軒は源之助の支配を迷惑とし、冥加銀三五枚、翌年より三〇枚を納めることによって株直請を出願した。その結果、安永元年（一七七二）に其の許可を得るに至った。この株を古株と云い、源之助に許された一株を新株と云う。かくして、「新、古の二株が許可されたのであるが、其後「新古両組あるは不取締」であるとして、双方より歩み寄り、天明七年（一七七八）二月、源之助の新株を止めて古株一二軒と合併するに至った。この時冥加銀を増して銀三枚と三一匁二分七厘とし、更に歩引口銭及び積口銭を定めて、(1)在々仲次を以て買入れる時は銀百目につき歩引口銭一匁、(2)綿屋仲間から買入れる時は同一匁三分、(3)三所綿問屋より買入れる時は同一匁八分とし、また綿買次積問屋より積出す時は運賃銀一〇匁につき八分の口銭とした。」⁽¹⁴⁾

かくして株仲間としての体制を整えた後、繁栄に向い、寛政九年（一七九七）四月、綿屋仲間との訴訟事件を引起し争ったが、⁽¹⁵⁾文化三年（一八〇六）には増株二〇株、冥加銀一四〇匁七分二厘七毛の増上納を出願し、翌文化四年（一八〇七）八月、許可を得て、株數三三軒、冥加銀三六枚となった。またこの時仲間定法を制定しているの、これによって同仲間の取引仕法を知ることが出来る。「文化四年の仲間定法」(1)、諸方綿商人より注文を請けて買次を為す時は問屋在々に出張して直買を為すべからず、必ず指図の場所に於て仲次を以て買取るべく、又予て仲次に注意し、糴買賃買を為さしめざるべし。(2)、当地綿の注文を受けたる時は、三郷仲間の内にて買集め仲間以外の綿を一切買次すべからず。山陽道筋、四国地の綿注文を請けたる時は、三所綿問屋に

て買集め決して右国々より直買すべからず。(3)買次出荷物は、充分吟味を加え、焼印小口印等を施したる後積入るべし。(4)、客方從來取引せる積問屋を措、他問屋に依頼し来たる時は、旧來取引ある問屋に紹介し、其承認を得たる後積出を為すべし。(5)新綿積物の出帆日限併に積留日限は、仲間評議の上、連札を以て江戸表に紹介し、一廿日限を定め之を諸方綿商人併に他国問屋中に通達したる後、銘々の勝手により日限の変更延期を許さず、又縱令客方指図たりとも、積初前又は積留後に於て、荷物を積出すべからず。(6)注文を請けたる荷物は其家により、積出すべし、客方の都合上、他問屋より直に積入るべしと申し来るとも謝絶すべし。荷物積込の船舶を検査するは勿論、約束荷物は積込日限迄に滞無く積入れ、送状に元値段を記入し、出帆を差支無からしむべし。(6)荷物は庭渡の約束なれば、一旦仲仕に引渡したる上は、該荷物に對し、如何様なる事変出来するとも、銘々より損銀を出す事あるべからず。(8)、運賃銀八分口銭は積問屋株の基礎なれば若し客方より交渉ありとも、決して客方の意に従うべからず。

以上記した箇条が主要なものであるが、比外に仲間参会、諸人用の分担、手代雇人、株譲渡、代判名替等の諸祝儀銀額、仲間通路人銀等について規定されている。⁽¹⁶⁾

(1)に見られる様にその本業は諸方の商人から注文を受けて繰綿の買次をなすのであるが、その買入に当つては、三所綿市問屋と同様に在方の直買を禁じられ、仲次を通して買入れていた。また大阪に積登った綿の取扱については、(2)に規定されている様に注文によってその買入先が異り、大阪及び近在の産綿の注文の時には綿屋仲間。山陽道筋、四国産の綿は三所綿市問屋から買入れ、

その場合、先述の如く口銭は綿屋仲間からの買入れは一匁三分、三所綿市問屋からの買入れは一匁八分と異っていた。(3)から(6)までは運営上の協定であるが、新綿積物の出帆日限、積留日限は仲間評議の上で決定され、連印を以て諸方綿商人に通達された。この通達がなされた後は、銘々勝手に日限の変更、延期は許されず、たとえ客方の指図であつても積留後又は積初前の荷物積出しは禁ぜられていた。尙積留、積初日限が決定されると各家には、行司より次のような廻章が廻達された。

「口 演

一、積留日限 五月九日 定日

右之通從江戸表申来候に付御通達申上候以上、

四月一八日

綿屋行司

右之通り承知仕以上

扇屋与兵衛 印

外二名連印」

「口 演

一、当新綿積初め日限 十月一五日定日

右之通從江戸表申来候に付御通達申上候以上

右之通承知仕候以上

扇屋与兵衛 印

外一八名連印」

三 綿 屋 仲 間

綿屋仲間は寛文六年（一六六六）七月、当時の町奉行石丸定治の許可によって発足して以来、当初の繰綿仲買から加工業者をも含めた綿一式を取扱うに至った。安永元年（一七七二）四月、株

を出願したがその折に奉行所より「宝暦一〇年（一七六〇）の名前帳の第一条に『繰綿仲間之儀』云々とあり、元祿、享保の触書にも『繰綿屋』とあるを今回の願出に綿屋仲間と改め、繰字を脱せるは何故なるか」と問はれ、それに対して仲間の年行司は宝暦当時の年行司が繰綿仲間と記せる真意は、今推し難しと雖も、繰綿屋といへる三字を仲間の総称と認めたるなるべし。名前帳第一条に『綿一式』と記し、第二条に『実綿繰綿』とある如く、前々より繰綿に限らず、綿一式の商売人入交りて仲間を組織せり、若し繰綿屋のみとならば、従来当仲間に加ふる外、綿屋は仲間を脱するに至るべく、難渋筆紙に尽し難し。希望者は顔見世銀に拘らず加入せしむべければ、現状の儘にて株許可を請う」とこの様に弁解している。

これらのことから、安永元年までは繰綿屋と称し、株の許可と同時に綿屋仲間と改称したと考えられる。

綿屋仲間の営業範囲を規定したのとしては天明五年（一七八五）六月、三所綿問屋との間に起った訴訟の裁許にみられる。それによると、(1)綿屋仲間は諸国在々より買入れた繰綿を其儘にて売捌いてもよい。(2)同様にして買請けた実綿は、繰綿、篠巻、簗綿、総糸、屑綿、簗下綿等に品を変えて売捌くこと。(3)問屋より買請けた実綿は其儘、売捌いても勝手である。(4)篠巻、簗綿、総糸、簗下綿等に品を変える積りで買請けた実綿は、其儘売捌いてはならない。(5)繰綿であっても値段の節は綿屋仲間にて市立を為してはならない。⁽¹⁹⁾と規定されている。先にみた如く安永元年に株を出願した同仲間は同年六月、冥加銀年々一五枚を以てて株の許可を得た。株数は不明であるが当時仲間数三郷合せて一三七名で

あった。⁽²⁰⁾尙この時併せて「当時綿商売人者（共力）、先年より仲間組合罷在候処、仲間外に而在々へ人を廻し、綿直買直積等致し候もの有之、渡世難儀之旨願出候間、綿問屋仕来候者之外、綿商売致候者共ハ、縦令商売相兼共、向後綿屋仲間へ相加り可申候、右之通三郷町中可触知者也、辰六月五日、」即ち仲間外商人の在々入込みと綿直買、直積をなすを禁じ、更に三所綿問屋、綿買次積問屋に属さない綿商人は総て綿屋仲間に加すべし、と云う主旨の触であるが、以後も天保七年（一八三六）二月、嘉永六年（一八五三）三月と同様主旨のものが発布されている。⁽²²⁾

綿屋仲間の特色は、以上の如き広範囲な営業と同時に、在々綿の直買、直積の特権をもっていたことである。而してこの特権は、前の触書にも見られる如く、しばしば犯され、中でも問屋商人による侵害は大きかった。そのため延宝四年（一六七六）、元祿一三年（一七〇〇）、享保一二年（一七二七）と相ついで在綿直買の禁止を請い、行町奉所はその都度禁令を発した。右の様な上への働きかけと同時に、安永元年には仲間顔見世銀を従来の二一五匁から大巾に減額するなどの努力を重ね仲間保全に努めた結果、天明五年（一七八五）には三八一名の多きに達した。⁽²³⁾同仲間の取引仕法は同年八月の「仲間申合」により大要を知る事が出来るが、次の通りである。(1)少額なりとも口銭を出して在々商人の持綿を買取るべからず。(2)市綿を買取りたる時は、代銀一貫目につき一〇匁を引きて渡すべし。(3)問屋方併に仲間同志の商売には、規定以外の歩引を為すべからず。(4)在々併に堺南北とも実綿掛目は、一〇斤につき二歩込にて請取るべし。(5)地島、総

糸、篠卷、屑綿等に至るまで仲間渡世たるべし。(6)実綿を打たしむるは仲間所屬の綿打職人に限るべし。(7)都て職人を雇入るには、前雇主に紹介し賃錢先借の有無契約日数の満期如何、等を問合すべし。⁽²⁶⁾天保一三年(一八四二)三月、他の諸組合、仲間と同様に三所綿問屋、綿買次積問屋、綿屋仲間の綿関係三株も解散になったが、嘉永四年(一八五二)には仲間の再興がなされ、綿屋仲間にあつては、嘉永の再興後株仲間停止中に開業した者を仮組と称し、これを従来の古組と合せると五百数十人の多きに達した。而してこの総仲間はその業種によって、(2)他国商を営む者は一番組、地方にて諸綿小商売を為す者は二番組、(3)南京綿、篠卷打屋、綿賃寄繰屋等の加工業者は三番組、と三組に分れて組織の整備がなされた。⁽²⁷⁾

【註】

1 『大阪市史』 第五卷七一三頁

2 前書 第一卷一〇八六頁

3 前書 第一卷一〇八六～七頁

4 百姓綿の直買直積の特権は、綿屋仲間のみに限られ、度々禁令が発せられた。

5 前書 第二卷一一九頁

6 前書 第二卷一二〇頁

7 宮本又次『株仲間の研究』二〇六頁

8 前書 二〇六頁

9 前書 第四章以下参照

10 古島、永原『商品生産と寄生地主制』

大阪の綿商人仲間(渡辺)

27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11

小林茂「都市商人と在郷商人」(近世史研究 二〇号)
津田秀夫「幕末期摂津型地域における商品経済の展開について」(社会経済史学第二〇卷三号)

『大阪市史』 第二卷三五五～六頁

前書 第二卷三五七頁

高橋龜吉『徳川封建経済の研究』三六二頁

『大阪市史』 第一卷一〇八九頁

前書 第二卷三五七頁

前書 第二卷三五九～六〇頁

宮本又次『株仲間の研究』二二〇頁

『大阪市史』 第一卷一〇八四～五頁

前書 第一卷一〇八七頁

前書 第一卷一〇八四頁

前書 第三卷八〇三頁

前書 第四卷一二四七、同二〇四八頁

前書 第三卷二四八、同三四八頁

前書 第一卷一〇八四頁

前書 第一卷一〇八五～六頁

前書 右同頁

前書 第二卷八五五頁